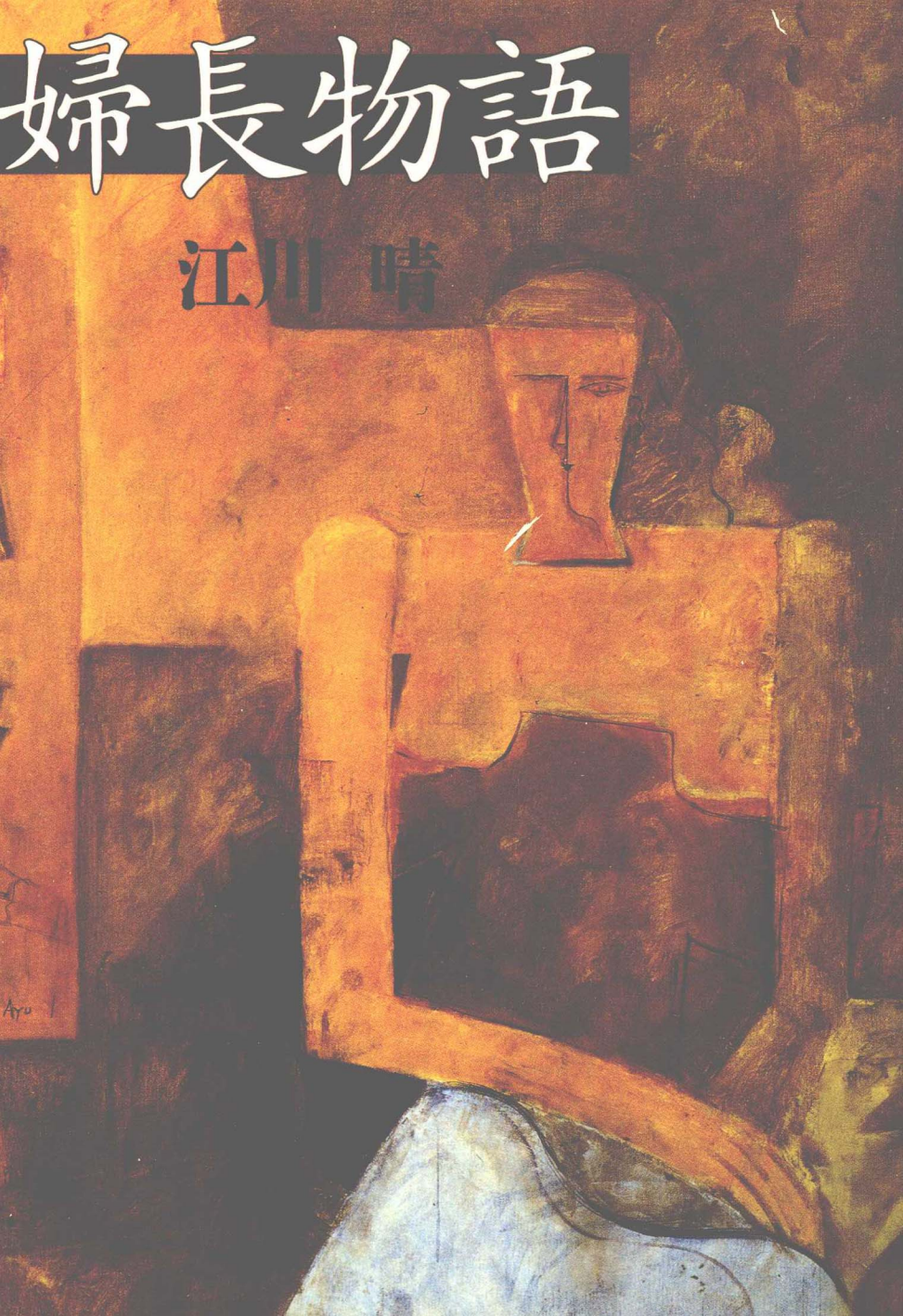


婦長物語

江川 晴



婦長物語

江川 晴



江苏工业学院图书馆
藏书章

読売新聞社

著者紹介——えがわ はる

1924年東京生まれ。1945年、慶応大学医学部付属看護婦養成所卒業。慶応大学付属病院勤務を経て、1983年まで日本軽金属株式会社診療室勤務。

1980年『小児病棟』で、第1回読売「女性ヒューマン・ドキュメンタリー」大賞カネボウスペシャルの優秀賞受賞。

著書は『看護婦物語』『産婦人科病棟』『外科東病棟』『企業病棟』『老人病棟』『法務教官夏川凜子』など。

本名 長岡房枝。

婦長物語
ふちやうものがたり

著者——えがわ はる
江川 晴

編集人——梅田康夫

発行人——伏見 勝

発行所——読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一 一〇〇—五五

大阪市北区野崎町五の九 一五三〇

北九州市小倉北区明和町一の一 一八〇二—七一

名古屋市中区栄一の一七の六 一四六〇—七〇

印刷所——凸版印刷株式会社

製本所——ナショナル製本協同組合

第一刷——一九九七年(平成九年)六月十七日

©1997, Haru Egawa

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

婦長物語
目次

第一章

婦長の生活

.....7

親友の死 9

総婦長に就任 21

患者の我

儘 27

患者と女たち 31

総婦長という職

務 37

深夜の電話 40

旧友の忠告 46

医療制度の改正 59

良子の生い立ち 70

結婚 81

夫の入院 85

終末期の医療 91

夫の死 98

第二章

混合病棟

.....101

星が丘総合病院 103

治療と看護 108

福祉

のメニュー 115

患者の幸せとは 121

もう

からない西病棟三階 126

姑の退院 134

嫁と姑の確執	142
特別養護老人ホーム	153
全身管理	159

第三章

痴呆病棟

.....167

豊富婦長の怒り	169	インフォームド・コン
セント	173	女医・向山美希医師の動向
医師と婦長	190	人間の生と死
悩み	202	婦長の私生活
実態	216	夜勤ナースの
耳	227	婦長たちの怒り
人間不信	234	院長の地獄

装画 島田 鮎子
装幀 中島 かほる

婦
長
物
語

第一章 婦長の生活

親友の死

「……今まで機会あることに申しあげましたとおり、病める人を看とり、人の命を守りとおす看護という仕事は、どう工夫しても金銭で評価しきれるものではありません。したがって、本来、経済的報酬を唯一の目的にする営利事業には馴染まない一面がある仕事であります。

本日、めでたく卒業され、これから職場に就かれる皆さんに贈る言葉として、まことに現代的でないことは十分承知していますが……、私の三十年に及ぶ経験から言っても、残念ながら努力がそのまま経済的に報いられることはあまり期待できないことを申し上げておかねばなりません。

超高齢化社会をむかえた今、幸い、諸先輩はじめ関係者のご理解もあり、現在ではある程度評価されるようになってきましたが……、それでも常に他の業界の後追いであることに変わりはありません。

しかし、どうか失望しないでください。報いられなかった分は心の報酬として、あなた方の内側へ蓄えられるのであります。

皆さんはそれによって、自分の人柄を磨き、やがては確固とした人生観を築くことができるでし

よう。それは金銭では決してあがなうことはできませんし、人としてなにもものにも動じないほど強く、生きる力がそなわるはずでございます。

この仕事はご自分たちの人生観を高めることに役立つばかりでなく、あなた方にとって、真の幸福とはなにか、についても重大な指針を与えてくれます。

そしてまた、人道的な看護という仕事そのものは時代を越えた歴史的価値として長く伝えられることと信じています。

皆様は卒業後、さまざまな問題に直面して悩むことが多いと思いますが、どうか人が人を助けるための仕事の価値を伝える使徒として、気高く生きてくださることを心からお願ひして、三年間にわたる私のつたない講義の締めくくりとさせていただきます。皆さんのご健勝をお祈りいたします」

教壇の上でノートを閉じ、八十キロの巨体を揺すりながら、最後の講義を終えた教務主任・大石良子は、受講生をひとわり見渡すと、いつものことながら胸を熱くした。

これが教職にある者の至福というものであろうか、そこにはキラキラ輝く瞳をこちらへ向けて、来るべき試練に耐えて、自分の思いを貫こうとしている理想に燃えた八十の目が、みな潤んでいるのを見とることが出来た。

いつときの静寂の後に、力強い拍手が起こると同時に、若い娘達の集団が持つ、熱い息吹と、明るい笑顔が、卒業した安心と共に爆発した。

「ヤッターヨー、まっかせなさい」

と素頓狂な声を上げる者もあれば、

「文鎮先生ありがとう」

気楽なニックネームで謝意を述べる生徒もいる。

アハハアと、まるで爆発したように沸き上がる笑い声を背中に聞いて大石良子が教室のドアを押して特別あつらえの婦人靴の底を、ギョッギョッと、海ほおずきのように鳴らし巨体を揺すりながら廊下へ出た、その時である。まだ卒業講演の感激もさめやらず、頬がほてっているさなかだというのに、チヨビ髭を生やした古狸の教務課事務主任、臼田が待っていてすでに薄くなり始めた頭髮にポマードをテカテカ塗った頭を近々と大石良子の鼻の先にすりよせてきた。大石良子は（なんだ、この人は……。この高尚な気分浸っている大切なときに、なんの恨みがあつて、私の至福の時をブチ壊すのか）とは思ったが、そこは仕事のことだから、仕方がないと我慢した。

「大石先生、講義が終わりましたら大至急来てくださるようにと院長先生が呼びです。恐れ入りますが、このまま一緒に院長室に行っていたきたいのですが……」

大石良子は、彼の脂臭い頭の匂いに辟易して、いささか生理的嫌悪を覚えたが……、それは今しがた講演したばかりの高潔な精神で抑えながら、

「なんのご用かは存じませんが、私にはこれから生徒達の卒業の手続きや式の準備もございしますので、できれば明日にしてくださいに院長にお伝えください」

と、一呼吸おく。というのも、ここで院内の仕事とは一線を画した付属高等看護学院の主任講師としてのプライドを示す必要もあり、世俗にまみれた院長あたりに、アゴで使われる立場にないことを古狸に教える必要があると思案しての返事であった。

だが、いつもは大石良子のひと言で引き下がるはずの古狸が、なぜか今日は頬をこわばらせて一歩も後に引こうとはしない。

「いえいえ、それどころではないのです。卒業式の方は私共の方で準備いたしますから、すぐに院長室へお越し願いたいのです」

言い終えた後、一段と声を落とした古狸はこちらの気も知らないで、ゾツとするほど大石良子の耳元に唇を寄せた。

「人事のことです……。これはご内密に。さきほど岬総婦長が、くも膜下出血で倒れ再起不能になったのです……。その後任のことで至急……」

「えっ！ 岬が」

大石良子は思わず大声を上げて絶句し、その場に立ち尽くしてしまった。今までの夢心地はどこへやら、いきなり天国から地獄へ堕ちた思いがした。

（過労だ！）大石良子は直観的にそう判断した。岬かな子は大石良子と同期の才媛で、人柄もよく、ズバ抜けた知能に恵まれ、美人で、おまけに繊細な神経の持ち主だった。

脳外科の病棟婦長を五年ほど勤めた後、エリート校出身者をさしおいて、総婦長に拔擢されたのは、その実力とともに、脳外科医から院長になった高田医師の強い要望があったからでもある。

婦長たちの中には、内心、面白くない者もいたが、当時、内科の病棟婦長をしていた同僚の大石良子は心から喜んだものだった。が、岬かな子の方は大石良子のことを気に掛けて、次の総婦長には是非とも大石良子にと思っていたらしく、彼女を脳外科病棟の婦長に推したのだった。しかし、根が呑気な質で、人を羨むことを知らない大石良子は、同僚の自分が部下にいては何かとやりにくからうと、自分から望んで臨床現場を離れ、病院付属の高等看護学院の教務に回してもらったのである。

それが僅か二年足らずで倒れるとは……。

「意識は？」

「意識どころか、実を申し上げると即死に近く、手の施しようもなかったとのことですよ」

「何てことなの……。脳外にいたくせに！ 言わないこっちゃない。自分で何もかも背負い込むからこんな結果になる。仕様がないなあ、岬は……」

友情を込めて岬かな子を責め、大石良子は深い溜息をつきながら、心では号泣していた。

「じゃあ、お願いします。私は卒業式の準備に掛かりますので……」

「うん……」

仕方なく首だけを縦に振ると、古狸は肩の荷を下ろしてせいせいしたらしく、白衣を翻して廊下の奥へ姿を消した。大石良子はそこで心を静め、いつもの通り、何事もなかったようにノッシノッシと歩を進めて院長室のドアを叩いたのである。

「あ、大石さんが見えました」

高田院長と込み入った話をしていたらしい岡本事務長が慌ててソファから立ち上がると、

「こちらへどうぞ……」

いつにない丁寧な物腰で、今まで自分が腰掛けていた院長の真向かいにあるソファを指し、自分はその傍らに立った。

「このたびは……」

院長の片腕と言われていた岬かな子が突然亡くなったので、なんとなく喪主に向かってすべき挨拶に似ている。

「全くお気の毒なことをした。遺族に申し上げる言葉もありません。考えれば、考えるほど、こちら

の不注意でした。高い能力をよいことに、困難な仕事を次から次に押しつけてしまった。結局、僕らが楽をした分、岬くんを苦しませる結果になることに気づかなかった……。ほかの人には言えないが、病院が殺したようなものだ……」

高田院長は肩を落として述懐した。

「徴候はなかったのですか？」

大石良子は静かに質問した。それに対し高田院長は沈黙していたが、岡本事務長がそれを引き取って、

「全くありませんでした。昨夜の当直を終えた岬さんが総婦長室へ入った直後倒れたらしく、我々が気づいたときにはすべては終わっていたのです」

「個室であることが、この場合、発作の発見を遅らせる結果になった。もう帰ったかもしれないと思っていた私が、岬君に尋ねたいことがあったので、念のために電話したが応答がなく……」

「私が七時半すぎ頃、総婦長室へ電話したら、いつもなら出るはずの広田婦長も出ない。用が足りないので廊下へ出ると広田婦長にバッタリ出会ったので、尋ねると、今朝は急患の処置に手間どって、まだ引き継ぎも終わっていないと言うので……。二人で総婦長室へ入って初めて岬さんが倒れているのを発見したのです。その直前までお元気でいつも通り働いていたのに……」

「いまになって考えてみると、時々頭が痛いと言額に手を当てていたことがあったにはありました。しかし私はそれを病理的な訴えとは思わず、問題の処理に困って……。なかば冗談に言っているとかかり理解していたのです。脳外科医である私の生涯最大の失敗だった。まことに済まないことをしました」